

# MARUMO LIGHTING NEWS



1996 JUNE

VOL. 78

- 舞台照明と演劇——野村 喬
- 照明担当になってしまった高校生に——平田オリザ
- 照明の不思議——如月小春
- 不幸な光——山崎 哲
- 『WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '96』開催のお知らせ
- 表紙写真——T.P.T.公演「エレクトラ」

# 舞台照明と演劇

## 野村 喬



舞台の浅黄幕が落ちると、燦々たる陽光に照り映える満開の桜の下に腰元姿のお軽、近習姿の勘平がいる。はるか富士山を望み、黄色の菜の花畑がひろがる遠見が描かれた道の辺で、鎌倉から戸塚山中まで来た二人の男女が、これからの身の処し方を語り合う。

ご存じの歌舞伎舞踊『道行旅路の花聲』（通称『落人』）の場面である。この清元の傑作は、初演が天保4年だった。

当時の見物と今の見物は、全く違う舞台に接していることに多くの人には気付かない。昼を欺くような陽光は、シーリングライトあるいはボーダーの照明によるものであり、だいたい、実はこの場面は夜の山の中で真っ暗で、提灯さえ持たぬ二人はお互いの顔も良くは見えぬ筈。

歌舞伎でも文楽でも、わざと夜の間を昼の場に置き換えるのは常套手段だが、初演のころは、電気照明が無く、明り採りの障子窓を全開しても、現今のように「昼を欺く」光景は、とても見られなかっただろう。

明治22年に開場した歌舞伎座は最初から電気照明を採用し、さらに関東大震災後の再建にあたって丸茂富治郎が劇場用配電盤とグリッド抵抗の調光器を設備して舞台照明に大転換を施した。

その結果、現代の観客は、幕末の見物が知らない舞踊劇『落人』を見ている。

次に一気に第二次大戦後の1967年（昭和42年）春、大阪フェスティバルホールで公演されたパイロイト・フェスティバル『トリスタンとイゾルデ』『ワルキューレ』の舞台に飛躍してみよう。

舞台には何の大道具もない。名歌手ニルソンやヴィントガッセン、アダムやシリヤたちが、衣装をつけてワーグナーの楽劇を表現した。これを成立させたのは、新パイロイト様式の演出を確立したヴィーラント・ワーグナーの考えを具体化した舞台照明であった。

大阪フェスティバルホールには、とてもヴィーラントの要求するような調光器がなかった。演奏はN響オーケストラによったが、パイロイトのスタッフたちは、はるばる大阪に照明機器を携行して来た。200台を超えるオリジナル舞台のスポットは無理であるとしてもその半ばに相当する機器によって、微妙なライティングを作り出したワーグナー楽劇は深い感動をもたらした。あの『ワルキューレ』の終幕に燃え上がる炎もまた、照明機器によって見せたのだった。むろん、パイロイト祝祭劇場の演出は、その後も変化をして、数年前のハーリー・クップファーの演出した『ニーベルングの指環』全曲ではレーザー・ライトまで使用して立体感を表現していた。

伝統芸能である歌舞伎の大道具は、独特の屋台を組んだり、遠見を描き、浪布や吊り枝などの装置を維持している。

しかし、現代劇の舞台美術は戦後大きく変化した。かつては木枠に紙を貼った上に膠を溶かした泥絵具で色を塗るといった工程でこしらえた装置に、ボーダーライト、フットライト、左右の舞台袖や照明室から数台のスポットライトで照らす明かりで劇を上演していた。

これが一変したのは、戦後に来日した東京文化会館

でのジャン・ルイ・バロー一座（特に『クリストファー・コロンブ』）、日生劇場で三度来日のロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（特に『冬物語』、『夏の夜の夢』、『十二夜』）に接したためである。

また、戦後に欧米に行って、各国の舞台を観劇した人たちが観たことによって、紗幕や鏡面を利用して照明による演出技術が伝えられたことにも大きな影響を受けた。

まだ電気照明がない18世紀以前から既に採用されていた遠近法を活用した舞台美術があったが、19世紀後半にあらわれた電気照明は、演劇を大きく変えた。

それが決定的に変化したのは、第二次大戦後の1960年代である。わが国で言うならば、東京文化会館、日生劇場、新帝国劇場、国立劇場などの相次ぐ建設開場に導入された劇場技術機器によるところが大きい。テレビジョン放送が開始され、サイリスタ調光器からメモリ調光器へと移行して、技術革新が進むなかで、調光操作卓が徐々に採用されていった。かつてはスポットを微妙にあやつって、いわゆるピン・スポットの名手と賞賛されたオペレーターの技術に頼ったものが、マイクロ・コンピュータ技術を駆使した照明プランナーの手に委ねられる日が来たのである。

70年代にバリライトが日本にあらわれ、色相変換機器、放電管系の投映機、双方向信号伝達によるインテリジェント照明制御機器の登場が、日進月歩のハイテク時代の舞台照明になっていった。80年代には、青山劇場、銀座セゾン劇場、東急文化村の二劇場がこうした新しい機器を導入し、90年代になって、名古屋に開場した愛知芸術文化センターの三劇場が最新の機器を設備して開場した。明年には新国立劇場（オペラシティ）が東京・新宿に誕生する。

既存の劇場もうかうかしてられない。現在の俳優座劇場は、かつて1963年に新劇専用劇場として誕生したのではなく、改築して80年にオープンした二代目の劇場であるが、近々、一カ月余休場して内部の照明機器（特に調光操作卓の取替え）を変えることになった、と報じられている。

いかなる建築物も竣工して、そのまま放置しては長期の使用に耐えない。したがって、劇場にとっては毎年予算に営繕費を計上して、適切な時期に取替えをおこなうことは必要欠くべからざるもので、それが舞台の床板やバトン取替えから客席の椅子取替え、客席

やロビーの床の張替えをとまなうことは知られている。その中でも、舞台照明機器の耐用寿命は意外に短い。俳優座劇場が16年も同じものを使用していたのは、あまりに遅きに失したことは言え、ぜひ最新設備を導入してもらいたいものである。が、ことは俳優座劇場に限らない。オープン以来20年を経過しているホールで、依然として開場以来の機器を使用しているところが少なくない。特に地方自治体の持つホールで、その傾向がある。

公立ホールでは、東京などの大都会の絶えず使用されている劇場やホールとちがって、一年間に使用する機会が百日以内というところが少なくない。そのために、使用機器の寿命がまだ残っていると勝手な判断をしている場合が多い。とんでもない話である。設備されてから時間が経過すれば、自然に能力が低下するし、だいいち、外から移動して来た劇団なり、プロダクションなりが、オリジナルに仕込んだ演出プランやオペレーション・プログラムに合致しない危惧がある。自分の劇場・ホールの機器がさまざまな公演に耐えられるかどうか、絶えず再検討すべきであろう。

むろん、器具さえ最新であれば、すぐれた舞台芸術が観客の前に展開できるというものではない。まだ、劇場に屋根・天井さえ張られていなかった時代、四国琴平の金丸座のような障子窓の開閉で太陽光線を採光して上演した時代、あるいは18世紀のパリのコメディ・フランセーズやオペラ座のように蠟燭の光で上演した時代でも、すぐれた舞台劇は存在した。

しかし、19世紀後半からの舞台芸術は、電気照明によって、明らかな変貌を遂げた。そのことは疑いを容れない。それは、16世紀末のシェイクスピアの戯曲が昼間しか上演されていなかったため、戯曲を読めると、夜の場面では、うるさいくらい、闇の暗さをセリフで強調していることでもわかる。

電気照明は、たんに昼を欺く明るさだけを見せるのではなく、暗闇をもあらわすものだった。舞台芸術の創造にたずさわる人びと、演劇を鑑賞する人すべてにとって、照明に関心を持つことが望まれる。

（のむら たかし）

評論家。歌舞伎などの古典から現代演劇、オペラまで幅広い舞台芸術を対象に研究、評論をおこなう。著書に『評傳眞山青果』『歌舞伎評論』『戯曲と舞臺』などがある。

# 照明担当になって しまった高校生に

→ 平田オリザ

さて、そろそろ、高校演劇もコンクールのシーズンを迎え、各校とも、照明の担当者を決めはじめた頃ではないかと思います。

高校三年間を照明に捧げた人もいるでしょうし、また、本当は役者がやりたいのに、照明係りをやらされているという人もいるでしょう。この文章は、そういった個人の事情はひとまず置いておいて、ともかくこれから照明プランを作らなければならない全ての高校生に、若干の余計なお世話を含めて、アドバイスのつもりで書きたいと思っています。

さて、アドバイスと書きましたが、実はこれから私は、「照明なんて要らない」って話を書こうかと思っています。いったい照明のPR誌にこのような文章を書いていいのか。一度パーティーの席で、お会いしたことのある丸茂電機の社長さんに、今度どこかでお会いしたときに怒られるのではないだろうか。まあ、そういうパーティーに出席しなければいいのかといろいろ心配をしながら、いま私はパソコンのキーボードを叩いています。

だいたい、世界一照明を変化させない演出家である私のところに、「舞台照明に関するエッセイを書け」などと依頼してくる方が間違っているのです。まあ、何が間違いで、何が正しいかは、よくよく考えてみないと解からないことですが。

本題です。

高校演劇の審査員などをしていて、いつも思うことは、オリジナル作品などの場合、「それは本当に、あなたの言葉になっているのか？」という点です。どこかで聞いたような台詞、どこかで覗いたような場面が、舞台上で繰り返されると、それだけで何だか、うんざりしてしまうのです。

もちろん、高校生が戯曲を書くわけですから、純粹

なオリジナリティを問う必要はないと思います。むしろ、演劇は模倣から始まる芸術ですから、大いに真似して、大いに盗んで欲しいわけです。しかし、盗むということは、文字通り、自分のものにするということです。模倣であるということを知覚して、それをどうにか自分の側に引き寄せてみる作業が必要です。

照明に関しても、同じ印象を受けます。

機材が発達し、関係者のご努力で、照明の講習会なども、かつてに比べるとずいぶん頻繁に行われるようになったと聞いています。高校演劇でも、全国大会レベルになると、さまざまな照明や舞台のテクニックが、ふんだんに使われます。

サス、ピンスポはもちろんのこと、バックサス、スモークマシン、エフェクトマシン、紗幕、ストロボ、スライドなどなど、プロの劇団も顔負けです。

しかし、その一つ一つが、本当に有効に使われているかということ、どうも疑問符を付けざるをえません。というよりは、あまりに装飾に懲りすぎて、肝心の舞台の中身が、かすれてしまう芝居が多いように思います。

いろいろな舞台技術を習ったり、あるいはプロの舞台で見聞きしたりしてきて、それを自分たちの舞台でも使ってみたいと思う気持ちはわかります。いえ、どんどん使ってください。ただ、その時に大事なことは、果たして、その照明や舞台の仕掛けが、本当に、演劇の「効果」につながっているのかという点です。

舞台というのは、本当に不思議なものです。どんなに数多くサスやピンスポットを多用しても、物語が判りやすくなるとは限りません。どんなに大音響で音楽を流しても、スモークを大量にたいても、それで場面が盛り上がるとは限りません。

美しい地明かりを一つだけ作り、ラストシーンでと



(ひらた おりざ)

劇作家・演出家。劇団「青年団」主宰。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。著書に『平田オリザの仕事！現代口語演劇のために』『平田オリザ戯曲集！東京ノート・S高原から』などがある。

っておきの空色にホリゾントを染め上げる、そんなシンプルな照明が、かえて作品全体として効果を生む場合もあるでしょう。

ここが大事なポイントです。照明の特殊効果は、演劇になくしてはならない類のものではありません。

演劇は、基本的には、舞台上に人が立って会話をしている。それだけで成立する芸術です。ただ、それだけでは、何だかまどろっこしいので、暗転をしたり、照明を変えたりして、お客さんを退屈させないようにしているだけなのです。極論すれば、余計なテクニックは使わないに越したことはないのです。

そこで、高校生の皆さんには、一つの舞台を創り上げる課程で、さて、この暗転は本当に要るのだろうか？このサスは要るのだろうか？このスモークは要るのだろうか？そういったことを、もう一度、きっちりと考えて欲しいのです。

照明の担当者は、そのところを、十分に演出と話し合ってみてください。そうして、その舞台に本当に必要な表現とは何かを、みんなで考えてみてください。みんなで智慧をしばって、一つでも暗転を少なくしていく、無駄な効果を省いていく、私はそこに芝居を創る面白さ、最初の一步があるような気がします。

## 新刊紹介

舞台照明の基本

# 光のデッサンから舞台照明の作り方まで

小川 昇 著／小川昇舞台照明研究所 編

昨年の春に亡くなられた舞台照明家の小川昇氏の著書『舞台照明の基本 光のデッサンから舞台照明の作り方まで』が発行されました。これは「マルモ・ライティング・ニュース」に連載された「舞台照明の基本」や、「小空間と劇場の明かりづくり」などの原稿をもとに、小川昇舞台照明研究所が再構成し、多少の補足を加え一冊にまとめられたものです。

イラストや図版も新たに描き直され、光のデッサンをもとにした舞台照明の作り方や芝居づくりのなかでの舞台照明の役割がわかりやすく解説されています。

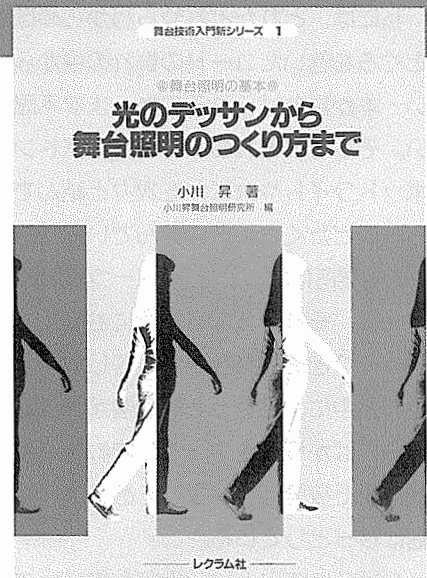
### ■目次内容(一部)

- 光の観察から光のデッサンへ ●絵画から学ぶ舞台照明
- 舞台照明づくりの実際

お問い合わせ・お申し込み先

→株式会社レクラム社

〒176 東京都練馬区栄町9-7 グレイス江古田205 TEL/FAX 03-3948-0228



◎B5版 160ページ

◎定 価 2500円(本体2427円)送料340円

◎発 行 株式会社レクラム社

# 照明の不思議

## → 如月 小春

小学生の頃、理科の授業で乾電池を並べて、豆電球を点ける実験をしたことがある。電池の端におそるおそる線を付けると、電球が灯る。その瞬間の、驚きとも喜びともつかない、それこそ、胸の中にパアッと明かりがついたような心地のことを、覚えている。

演劇に関わるようになって20年近くになるけれど、今でも、劇場に入って照明を仕込み、シュートが始まって、ライトが一つ一つ点く時には、あの子供の日と同じような、驚きと喜びの入り交じった感覚におそわれる。

照明さんたちは、こわいもの知らずに、転々と高い脚立の上に立ちあがり、イントレにのぼり、天井裏のような場所から当たりを直して回る。

私には、どれがどれやらわからぬほどからみあい、とぐろを巻いたコードの群れの中から、どうして正しい一本が見分けられるのか、まず不思議でしょうがない。そして、それらのコードとバトンに吊るされたスポットライトやなにかを次々と結んで、気がつくと、あれほどたくさん床に並んでいた機材たちは、それぞれの居場所に散ってゆき、何一つそこに残されていない。

一度、それぞれの居場所におさまった機材たちは、ひっそりとその存在を消してしまう。芝居が進行している最中に、間違っても観客が俳優を見ないで照明機材の方ばかり目をやってしまうように、黒っぽく塗られた彼等は、息をひそめて、天井や壁や、舞台の袖にじっとしている。

今は私は演出という役割を担当しているけれど、本当は照明か、音響をやってみたかった。劇作や演出、俳優に衣装や美術といった人々が、稽古や製作をつみかさねてようやく劇場に入れるまでにこぎつける。そこへ突然やって来て、光や音を舞台にもたらし、一瞬にして、その場の空気や湿度までも変えてしまうのが、

照明と音響である。魔法のような仕事とっていい。

けれど、未だに小学校の豆電球の実験並みの科学的知識しか持たずにいるのに、どうして照明家になれようか。仕組みがわからないからこそ不思議で、不思議だからこそ余計に美しく思えるのかもしれない。

だから、実際の芝居創りの現場では、私は、もう15年近くも一緒に仕事をしている照明家のKさんに、言いたい放題。仕組みがわかっているなら遠慮して言えないだろうことも、わからないからこそ、心おきなく話せる。「あそこは水の底にいるような感じにしたい」だの、「ものすごく高いところから一条の光が差し込んでるように見せたい」だの、上演予定の小さな劇場の設備や構造のことを全く考慮せずに言いまくる。

言いまくるのは、実に楽しい。楽しそうな私の横で、Kさんは「えーっ」とか、「うーっ!」とか、「はいはい」だのと言いながら、時折頭をかかえている。それでも、Kさんはどこをどうするのか、結局は、水の底も、一条の光も、作り出してしまふのだ。そんなKさんのアカリのワザを楽しみに、私たちの劇団の芝居を見に来てくださる観客も少なからずいる。

Kさんによれば、私が演出する芝居には、青いアカリをたくさん用いるようになるのだそうだ。だから、いつも青だけは薄いのも濃いのも、緑っぽいのも紫があったのなど、ニュアンスの少しずつ異なった色をたくさん用意して来るといふ。

青の次によく使うのが、アンバー系。反対に、赤はほとんど使わない。ピンクは他の色と重ねて、やわらかい明るさを出すために使ったりするけれど、赤はとてもキツイ赤を、一シーンだけ、たっぷり使うとか、そういうふうにはか用いない。

演出家によって、いろいろと好みの違いがあるのだろう。けれどKさんにそう指摘されて、改めて私は、



(きさらぎ こはる)

劇作家・演出家。東京女子大学在学中より、劇団「綺崎」で劇作、演出を始める。1983年に劇団「NOISE」を結成、「DOLL」「トロイメライ」などの作品を発表する。

自分が青という色にさまざまな思いを込め、その思いの分だけ、少しずつニュアンスの異なるものを求めたのだな、と自己発見したのだった。

そういえば、私の創る芝居は、夕暮れから夜を越して、朝になるまでの時間を舞台にしたものが多い。赤味の残る夕暮れから、次第に空に青味が濃くなり、公園には誘蛾灯、団地には点々と窓明かりがともる頃。それから、さらに青から群青。月の光が白く流れ、やがて、深夜の沈黙の闇。そこから少しずつまた空の色が変わってくる間の、微妙な青のニュアンス。そうなのだ。私にとっては、微妙に変化する青こそ、心模

様をうつしだす色なのである。だからこそ、舞台の上には、デリケートに、ナイーブに、青い空間を創りだしたいとも思っているのだ。

どうして出来るのかわからない。まるで魔法のようにともる照明。けれど、本当の不思議は、本物の夕暮れよりもっと夕暮れらしく、夜よりも、夜を感じさせる、照明デザインの方かもしれない。

最終リハーサルが始まって、アカリが舞台を包む時、私は、ただもう一番好きな場所に出かけた子供のように嬉しくてたまらなくなる。好きな場所、それは、劇場だ。

## 読者の皆様へ ←

## → 編集室

77号をお届けして以来、「マルモ・ライティング・ニュース」の発行が滞ってしまい、ご愛読いただいております読者の方々には、大変ご迷惑をおかけしました。今後は定期的な発行と、企画内容の一層の充実に向けて、新たな編集体制を組織し、「マルモ・ライティング・ニュース」を発行してまいります。

一層のご愛読をお願い申し上げます。

今号はエッセイを中心に構成されておりますが、次号でも関係分野の方々から「照明」をテーマに原稿をいただくとともに、さまざまな角度から舞台・スタジオ照明についての記事を掲載したいと考えております。

現在、編集室では右記のようなプランをはじめ、さまざまな企画を検討しております。

ご意見、ご要望など、お気軽に編集室までお寄せください。

### ●光の質問箱

学校などでの芝居づくりのなかで、ぶつかってしまった舞台照明に関する疑問、難問をお寄せください。一緒に解決策を見つけましょう。

### ●話題の舞台の照明プランを探る

話題になっている舞台作品を取り上げ、照明プランのコンセプトと明かりづくりのポイントを探っていきます。印象に残った舞台、ぜひ照明プランを知りたいと思う作品をお知らせください。編集室が代わって取材します。

### ●照明器具の基礎知識

照明器具の種類から、その特性と働き、そして安全で効果的な使い方まで、特に初心者の方に、確かな知識を身に付けていただくことを目的に記事を構成します。

# 不幸な光

→ 山崎 哲

私の友人でもあるのですが、海藤春樹という照明デザイナーがいます。もともと舞台専門の照明プランナーだったのですが、いつしか展示、イベント、室内、ビル、都市と仕事の領域を広げ、呼びようがなく「照明デザイナー」と呼んでいるようです。照明器具もデザインしています。

その海藤春樹に、もうすいぶん以前のことで、どうして照明をやるようになったのかと聞いたことがあります。と、かれはこう答えました。「光って、かわいそうじゃない、誰にも注目されなくて」。私は「海藤らしいなあ」とひどく感銘したものです。

このことばには含みが隠されています。

まず、誰もが光はあって当たり前だと思っていることです。太陽と同じように、あるのが当たり前ですから、ふだん、みんなそんなに気にとめないわけです。

なにも舞台に限りません。お店や家のなかの「光」のことを考えてください。日本のぼあい、蛍光灯が典型的ですが、明るければいいといった感じで、ほとんど光に対する配慮がなされていません。

光はそれほどふだんから不幸なのです。

それがかわいそうで照明を仕事に選んだと、かれは言っているわけです。

そして、そのためかれはあることをしました。舞台、とりわけ演劇では「光源」を観客に見せるのはいけないことだとされてきたのですが、そのタブーを破り、堂々と観客に光源を見せるようにしたのです。

つまり光を主張するようになったのです。いまでこそ珍しくなくなりましたが、かれがそれを始めたころは大いに響感（ひんしゅく）を買ったものでした。

演劇では光源はなぜタブーにされてきたのか。冗談めきますが、太陽は一個でいくつもあるはずがないという考えがあったからです。いいかえると舞台の「光」

をどこまでも自然の光に、太陽の光に近づけることを目的にしていたからです。

このことは昔の台本を読むととてもよくわかります。昔といっても、わずか30年ほどさかのぼればはっきりするのですが、ほとんどの台本に「時」「所」なんてのいうが書き込まれています。光に関して言えば「朝」「昼」「夕方」「夜」などときめ細かに指定してあるのです。どうしてなのか。

すこし難しくなりますが、近代に入ると自然をどう捉えるかという問題がうまれました。小説でいうと国木田独歩などがそうです。かれはそれまで日本人の考えにはなかった「遠近法」を取り入れ、自然というものを描写しようとしたのです。一般的には自然主義だとか写実主義といわれていますが、はやい話、近代主義的な自然観を作り出さなければいけない時代だったのです。

演劇もその波を受けました。舞台に遠近法に基づいた近代的な自然を構築しようという動きが起こったのです。ひらたく言えば現実に近い、現実の風景はこうだという風景を作り出す動きです。

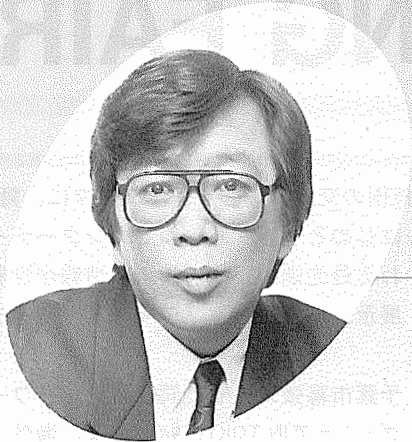
装置のことを考えると一番わかりやすいと思います。「新劇」の装置には遠近法が取り入れられています。歌舞伎の装置には遠近が用いられていません。

とうぜん照明もこの影響下にありました。「自然光」そのものを作り出そうとしたのです。

海藤春樹はそのタブーを破ったのです。もう少し言えば、どんなに努力したところで舞台の光は自然光にはならない。舞台の光はどこまでいっても「人工」の光で、自然光ではないと言ったのです。

これもいま思うとごく当たり前のことですが、そのことを言うためにかれは「いくつもの」光源を観客の目にさらけ出してみせたのです。





(やまざき てつ)

劇作家・演出家。1970年代に劇団「つんぼさじき」を主宰。1980年に劇団「転位・21」を結成。「うお傳説」「漂流家族」により第26回岸田國士戯曲賞受賞。「ジロさんの憂鬱」「エリアンの手記」「まことむすびの事件」により第21回紀伊國屋演劇賞受賞。

「光」の問題は、それほど大きな問題を孕んでいたのです。

ところで高校演劇やアマチュア演劇を見ていて、一番気になるのも「照明」です。救いがたいほど下手です。汚いです。

実際に器具を吊って稽古することができないせいかもしれません。器具そのものが少なかったり、仕込みの時間が取れなかったりするせいかもしれません。

でも一番大きな理由はたぶん、光はあって当たり前だと思っているからです。人間や「もの」と同じよう

に、そこには光があるのだと感受するチカラがないからです。

いいかえると、光は人間やものを照らし出すためにあるのではない。光はただ光のためにそこにある。そういうふうには光を捉える思想がないからです。

そうした考えに裏づけられた光だったら、たとえ電球一個だろうと、ベントウ箱(ベビー)一個だろうと、光そのものを感じさせるやさしい光ができあがるはず

## 平成7年度 第15回日本照明家協会賞決定

平成7年度 第15回日本照明家協会賞が発表されました。受賞者は次のとおりです。

### 《舞台部門》

文部大臣奨励賞・大賞

辻本晴彦(舞台照明満平舎)

まにまアート第5回企画公演/秋元松代作・立沢雅人演出『極めて家庭的に』一木村好子の詩集より一の成果に対して

優秀賞

前田正秀(大阪共立)/竹下克己(吹田市文化振興事業団)

安部昌臣(エルエムプランニング)/井上正美(松崎照明)

新人賞

遠藤正義(東京舞台照明)/山口暁(ライティングカンパニーあかり組)

特別賞・奨励賞

恵木和実(篠本照明)/久米市郎(ライティングセンター久米)

小嶋薫(ジェイエス)/藤森浩二(大阪共立)

上原隆司(ライティングオフィスツポオン)/杉浦弘行(大庭舞台美術・照明研究所)

室伏生大(ライティングカンパニーあかり組)/柳瀬敏実(東京舞台照明)

特別賞・努力賞

今西尚史(大阪共立)/舟木幸人(劇団文芸座)/千葉高志(大分県立芸術館)

### 《テレビ部門》

文部大臣奨励賞・大賞

本間利明(フジテレビジョン)

フジテレビジョン制作・放映/『北の国から'95 秘密』の成果に対して

優秀賞

伊藤正雄(共立)/鈴木信雄(日本放送協会)/井村正美(松崎照明)

奨励賞

小野寺政義(日本放送協会)/関康明(日本放送協会)

佐野利喜男(日本テレビ放送網)/柿本幸一(読売テレビ放送)

新人賞

加瀬弘行(フジライティングアンドテクノロジー)/古閑康弘(テレビ熊本)

佐藤昌美(NHKテクニカルサービス)/澤村晋輝(日本放送協会青森放送局)

努力賞

安藤公久(日本放送協会名古屋放送局)/樋口章一(照明技術)

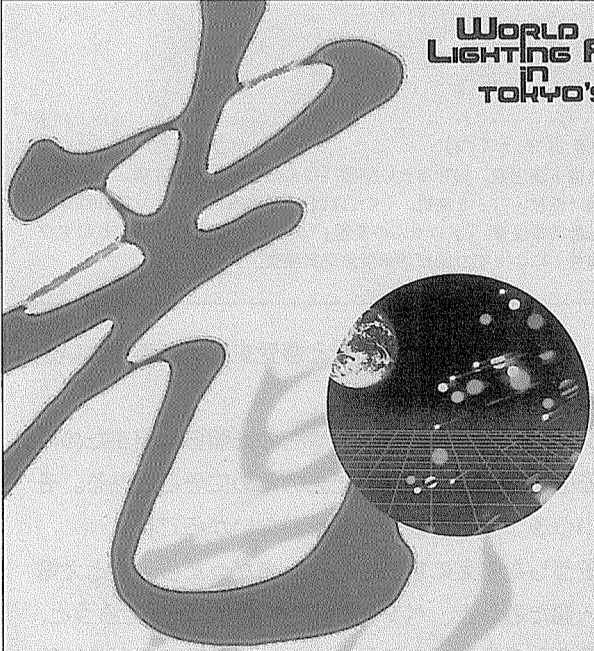
知名勇(沖縄テレビ放送)/梅原健(ハートス九州営業所)

伊藤馨(やの舞台美術)/和田良雄(全国朝日放送)

技術賞

浅山隆夫(日本放送協会)

# WORLD LIGHTING FAIR IN



World  
LIGHTING FAIR  
IN  
TOKYO'96

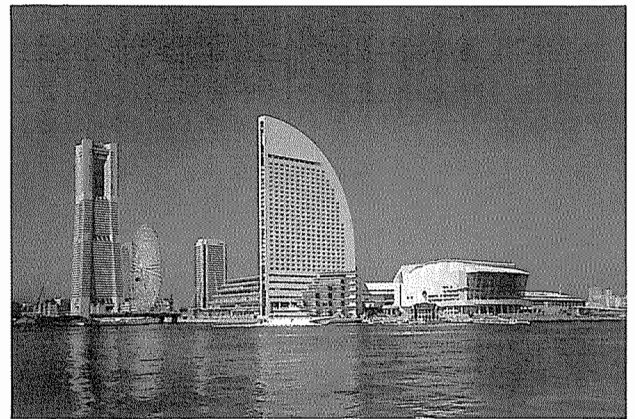
World  
The Leading Edge Of  
The Entertainment Industries To The 21st Century.  
Lighting Fair  
in Tokyo '96

「人と技術の交流の場」を基本テーマに、舞台、テレビ、映画をはじめとする、あらゆるエンターテインメント産業にかかわる最先端の製品、技術、情報が世界中から集められ、展示、紹介される「ワールド・ライティング・フェア」。

前回、千葉市幕張メッセで開催された「ワールド・ライティング・フェアIN TOKYO'94」では、海外12社を含む45社の出展と15,890名の来場者を記録し、国際的なイベントとしての位置づけと評価が得られました。

今回の「ワールド・ライティング・フェアIN TOKYO'96」は、開催場所を「みなとみらい21」の中核施設「パシフィコ横浜」に移し、充実したアクセスと設備環境のもと、前回以上の成果が期待されています。

●パシフィコ横浜



## ●「ワールド・ライティング・フェア'94」のMARUMO出展ブース



# TOKYO '96 開催

日時：6月20日（木）～6月22日（土）  
 10：00～18：00（最終日のみ17：00）  
 場所：パシフィコ横浜 展示ホール

MARUMOは「ワールド・ライティング・フェア IN TOKYO '96」への出展にあたって、ハイテクノロジー時代における“人と人、人と物、物と物の繋がり”をテーマに、『絆……HUMAN LINKAGE』のキーワードを掲げ展示をおこないます。今回の展示ブースでは、“MARIONET STAR”と“MARUMO WEB”を中心とした、次時代へ向かうMARUMOの最新技術と新しい試みの数々を身近にご覧いただけます。



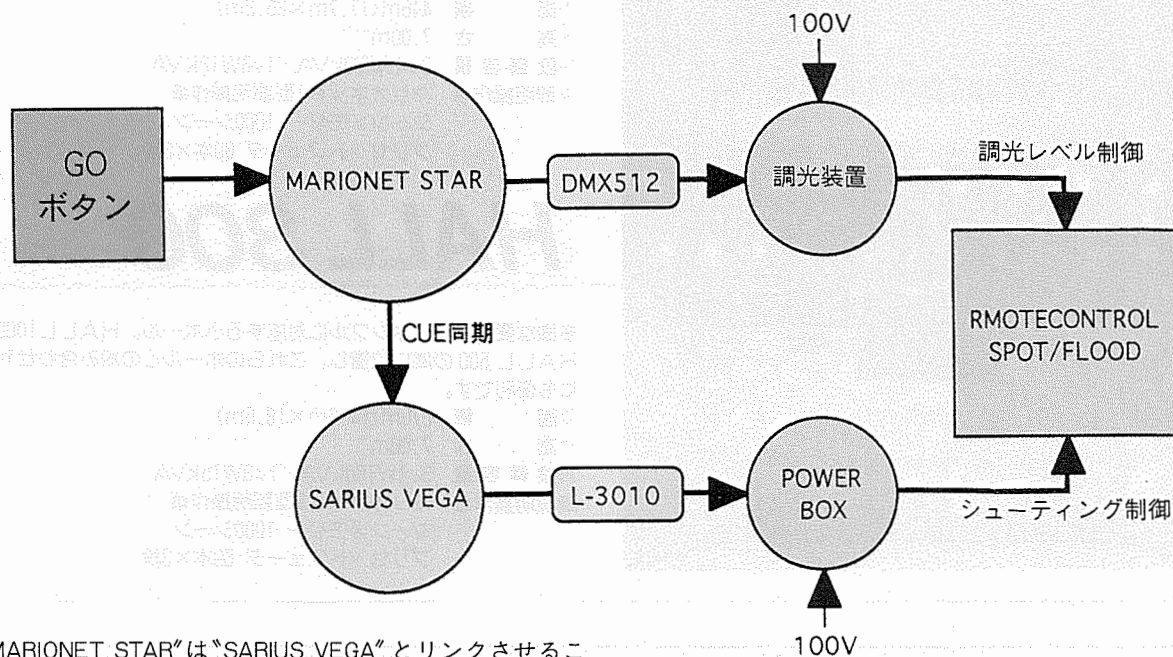
## MARIONET STAR

コンピュータシステムの調光卓として、絶大な信頼と高い評価を得ているマリオネット調光操作卓が、さらに機能をグレードアップしてデビューします。ニューデザインの“MARIONET STAR”の最新機能の数々と、サリウス・ベガなどのムービング系操作卓とリンクさせた最新システムを紹介します。

## MARUMO WEB

MARUMOではインターネット上にホームページを開設します。製品情報をはじめさまざまな情報を提供し、またご意見などもお寄せいただきながら、双方向コミュニケーションを深めていきたいと考えています。MARUMO WEBは国内、海外に向けて情報発信します。

### ● リンクされた『MARIONET STAR』と『SARIUS VEGA』のシステム図



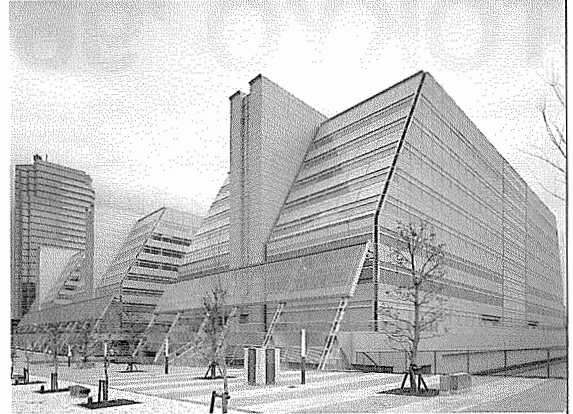
“MARIONET STAR”は“SARIUS VEGA”とリンクさせることで、照明CUEによって調光レベルとムービングライトのシューティングを同期実行することができます。

# TFTホール

●東京ファッションタウン●

東京都江東区有明3-1-34

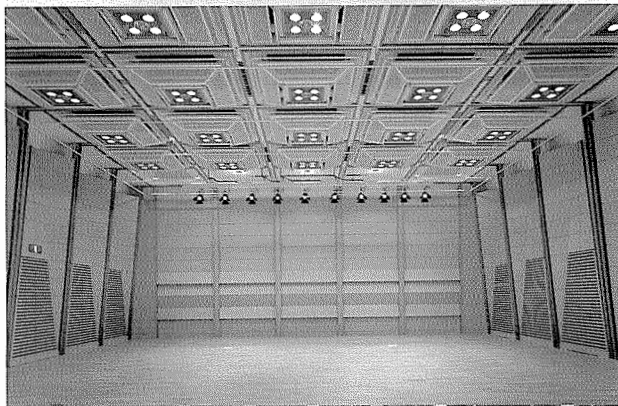
新しい東京の中心となる臨海副都心に、21世紀の生活文化産業のビジネス拠点を目指して誕生したTFTビル。注目を集める新たなコンベンションエリアに立地するこのビルで、情報発信と発表の場として中心的な役割を果たしていくのがTFTホールです。それぞれ規模や機能が異なる3つの多目的ホールが、同じフロアに配置されており、単独での使用はもとより、それぞれのホールを組み合わせ活用することで、ビジネス関連のイベントから文化イベント、プライベートパーティまで、多彩な企画や演出に対応していきます。



## HALL 1000

メタリックな近未来的イメージを漂わせる内装の大ホール。大規模なファッションショーや展示会、見本市などに適した空間です。

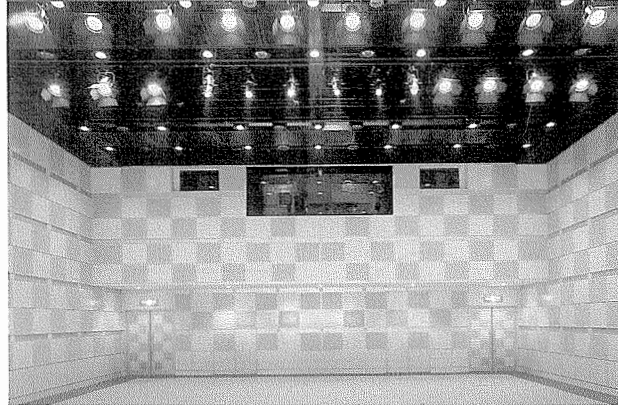
- 面積 900㎡(39.5m×23.5m)
- 高さ 6.25m
- 設備容量 3φ4W360kVA/1φ3W25kVA
- 照明操作卓 マリオネットII型照明操作卓  
シーンメモリー 1000シーン  
プリセットフェーダ 100本×3段



## HALL 500

木質の内装を施した中ホール。高い遮音性と音質の良さが特徴。260席のロールバックチェアが設備され、国際会議、映写室、コンサートなどに利用できます。

- 面積 446㎡(17.7m×25.2m)
- 高さ 7.00m
- 設備容量 3φ4W300kVA/1φ3W12kVA
- 照明操作卓 マリオネットII型照明操作卓  
シーンメモリー 1000シーン  
プリセットフェーダ 80本×3段



## HALL 300

多様な要求にフレキシブルに対応する小ホール。HALL 1000とHALL 500の間に位置し、これらのホールとの組み合わせ利用にも便利です。

- 面積 270㎡(14.6m×18.5m)
- 高さ 7.00m
- 設備容量 3φ4W180kVA/1φ3W15kVA
- 照明操作卓 マリオネットII型照明操作卓  
シーンメモリー 1000シーン  
プリセットフェーダ 60本×3段

## MARUMO LIGHTING NEWS

●「マルモ・ライティング・ニュース」は、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●発行：丸茂電機株式会社／●編集：営業技術部企画課 〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0323／●発行：平成8年6月